

読売歌壇

小池 光選

「ごつろ」と喉を鳴らしてきみの顔舐める子猫に嫉妬している

【評】「きみ」は老婆がごつろ。もたらせて来た子猫は妻にはかりなつく。妻の顔は舐めるがわたしの顔は舐めない。それでジェラシーを覚える。いくつになっても嫉妬心は消えない。それが人間というもの。

色付いた桜並木は晩年の女優のような温もりがある

【評】むかしきれいだっただが年老いてゆくのは味わいのあるものだ。まして女優なら桜並木の紅葉のような「温もり」がある。

転がれる落ち葉一枚目に留まるもう会ふこともなしと思へば

【評】落ち葉一枚との一期一会。散って、飛んでいって、もう再会することはない。人生はそのような邂逅の連続だ。

アマゾンに降るひとつとゴビに降るひとつと

の雨あなたならどちら

茂吉書きし新聞エッセイ「曼珠沙華」を九十年経て音読している

移動販売の豆腐屋さんのドーナツを三つ供えてあなたの命日

山の湯は高齢社会の縮図にて昔の若者朝から集ふ

久々に映画行ったら泣いちゃったラストシーンの音楽聴いて

一等は大きなクマのぬいぐるみ当てる爺じに拍手が起きる

古希かき吾ははじめたる太極拳まだまだひよこ

老師九十三

生け簀の娘役になる村歌舞伎七十過ぎし翁の大役

【評】歌舞伎なので、演じるのはすべて男性にちがいない。生け簀の役は派手な立ち回りをする必要がなく、七十歳を過ぎた人でも務まりそう。可憐な娘役の姿が目につく。

冬なれど冬至過ぎれば少しだけ希望は恋の気分になって

【評】冬至は冬の真ん中だが、この日から少しづつ昼の時間が増えると考えれば明るい気持ちになる。そんな小さな希望を「恋の気分」に重ね合わせたところが新鮮である。

捨てねばとにおいをかいで抱きしめてまた仕舞い込む夫の遺品

【評】取り出して触れたり見つめたりすると夫の遺品を捨てられなくなる。「におい」をかいで「まで」表したことで心情が深くなった。

「大切に読んでください無料です」古本百冊車庫に広げる

夕焼けが車窓を流れ替わってゆく待つ人なければ心も急かす

ハンカチが消える手品をして見せる驚く人と微笑する人

寒風を受けてバス待つ少女のおしやべりのなか風邪声もあり

毎日が小さな旅だ買い物のリュックの中身は根だけ

夫逝きて一人庭掃く冬の朝南天の実のまっ赤に輝く

洗濯物あと六分で干さなけりや会議が始まるリモートワーク

栗木 京子選

俵 万智選

一年の違ひであんなに世話をやく年長さんは黄色い帽子

【評】大人の一歳違ひはほぼ同年代だが、子どもにとっては大きな違いだ。黄色い帽子が明らかに違う動きをしているのだらう。目撃者としての驚きがストレートに伝わってくる。

日向ぼっここのぼっこみたいなやさしさで母がタッパー詰め詰めにする

【評】「ぼっこ」の語源については諸説あるが、温もりや寛ぎのイメージだ。響きも優しく、母親の温もりを重ねて新鮮な比喻になった。

時刻でも線でもなくて朝刊の届いた音で日付は変わる

【評】一日の始まりを、何で実感するか。理屈ではなく、個人の日々の暮らしのなかで、その境界はある。結句の断言が心地よい。

「かしこまりました」と答えるとりあえず「かし」は小さく「こまる」を大きく

牧草は歩いた歩いた冬の道わも歩かな午後の日あびて

根拠のある生き方なんてあるかしら非常階段からの初空

救急の音で道路の左端に寄せる車にある連帯感

遊園地ひとつを作り出すやうにお誕生日の机を飾る

優しいか優しくないのか分からないスイートチリに似ているあなた

ギョベックリ・テベと遺跡にギョベックリしながら見る若き人類

黒瀬 珂瀾選

漂浪の夜気あつめつつ書を食べる買多の影へビル風吹きぬ

【評】作家・西村賢太の小説群の主人公、北町買多。作者自身の投影とされ、粗暴なその日暮らしの中で、私小説を書くことに目覚めてゆく。文学で生きる人間への共感の歌。

由布なのか湯布なのか背に聞きながらミントグリーンの切符を通す

【評】元来の温泉の名前は「由布院」温泉。昭和三十年に由布院町と湯平村が合併してできたのが「湯布院町」(今はさらに合併して由布市。文字一つの違いに宿る、土地の歴史と人々の思い。それに出会ふ、旅という時間。

ご近所の懇談会で生前の父を褒めらる見知らぬ父を

【評】皆が褒める父の姿は自分の知る父ではない。人は色んな面を持っているものです。コミックがすぐにアニメや実写化をしていくように忙しい師走

副作用に悪夢を見ると記載ありあたたかくしてベッドに入る

バインター来年分も注文し人事異動とう天命を待つ

見直せば見直すほどにミスありて介護ファイルにぼやきの師走

集まれる鹿さん押しつけ釘押すすこし濡れしか飛火野信号

我がものとなりし喜び溢れつつ集い植ゑにし田は荒れゆけり

高みへと気流の限りを見定めて轟ひるがへり背より落ち来る

千葉県 高品 弘

◇投稿規定◇ はがき1枚に未発表の1作品。住所、氏名(ふりがな)、電話番号を明記。◇他の媒体、選者への二重投稿は厳禁です。選者が添削することもあります。〒103・8601、にほんばし 蔵前郵便局留、読売歌壇(俳) 壇、〇〇先生(希望選者名)係または読売新聞オンラインから ◇毎週月曜日に掲載 右の影絵はゆきかき